

## 質疑応答

岡 野中さん、ありがとうございます。ご紹介くださったフェビーさんの作品、全部読みたいです。

二つ質問があります。まず、ライフスタイルのイスラーム化というお話がありましたが、具体的にどういうことでしょうか。

野中 そもそも礼拝をする人たちが増えたり、真面目に断食をする人たちが増えたというレベルから、先ほど言ったように服装の話、テレビドラマ、映画、文学作品、雑誌など全てにイスラームのようなものが付いてくるということだと思います。

岡 もう30年以上前の話になってしまうのですが、モロッコに住んでいたことがありまして、インドネシア大使館の方と仲良くなり、レセプションなどに呼んでいただきました。そのとき、大使夫人や外交官の奥さんたちの衣装が、インドネシアの伝統的な、非常に体にフィットしたものでしたのです。

野中 クバヤというものです。

岡 ヒジャーブどころかニカーブまで身に着ける女性たちが増えている中で、今では、外交官の奥さんたちもヒジャーブなどをしているのでしょうか。

野中 今では、当然、みんな着けています。クバヤという伝統も残りつつ、クバヤをいかにイスラーム的に変えていくかということをデザイナーたちが考えていて、インドネシアの伝統服をイスラーム服に転換していくというか、その折衷案のようなものが流通し、人々に好まれています。この流れはすでに15年ぐらいあって、インドネシアの伝統スタイルは残しつつ、フィット感はややルーズになっていき、そこにヒジャーブを合わせていくスタイルに変わっています。

岡 あるとき驚いたのは、恐らくクバヤではないと思うのですが、何かバリ島っぽいような感じの、ちょっと肌が露出するような衣装で、「この人たちはムスリムなのに、こんな服を着ていいの?」と思ったのを覚えているのですが。

野中 もちろん、30年ほど前にはあったと思います。

岡 今はもうないのですか。

野中 今はないです。今は絶対に外交官の奥さんたちはそういう格好はしません。特に、モロッコなどイスラーム教徒の多い国では、間違いなく、皆、肌を全部覆っています。

岡 では、単に社会で普通の若い女性たちがそうしているというだけではなくて、上から下までそういう感じなのですか。

野中 そうですね。ヴェールを被り、肌を覆うという流れは1980年代以降、都市部の大学生から始まりましたが、2000年代に入ってより年齢の高い、上流階級の人々にも広がり、今は農村社会にまで広がっています。

075

岡 もう一つの質問は、うんちの中にアッラーのLafazを見てしまうというのは、過激なイスラーム主義者にすれば、命を狙っても不思議ではないような冒涇ではないかと思うのですが、フェビーさんはそういう目には遭ったりしていないのですか。

野中 最初に出版した出版社 Publikultur の代表はそれをとて心配していて、フェビーは若い女性だし、最初の出版社に断られたということもあって、危ないのではないかと思ったようなのです。が、ふたを開けてみると、一番ひどい批判というのは、最初の出版社から「これはイスラームを冒涇しているものだ」と言われたことぐらいで、表立って非難を浴びせてくる人はいなかったらしいのです。ただ、今はまだ、過激派や急進派の人たちには、フェビーの作品が届いていないだけか

もしれません。これがもっと全国的に知られていくようになると、批判や危険もより大きくなるのかもしれませんが。

石井　今さら聞けない質問ですが、最初の方で、インドネシアでは、開発独裁の時代に元々のリベラルなイスラームが奨励されたと同いしましたが、そうした潮流の成り立ちには、政権側の「御用宗教」的な作為が介在したという面があったのでしょうか。関係して、基本的でお恥ずかしい質問ではありますが、インドネシアはそもそも聖と俗、あるいは宗教と世俗との関係はいかがで、例えばイスラームは国教化されているのでしょうか。

野中　ありがとうございます。後者からお答えすると、イスラームは国教ではありません。公認宗教が六つ定められていて、基本的にはインドネシア国民はそのどれか一つを信仰している形になっており、現状では無宗派は認められていません。イスラームは、この公認宗教の一つです。そして、これらの公認宗教を管轄する省庁として、宗教省があります。

一つ目の質問については、そのとおりです。開発独裁の時代には、政府の方針に沿う形のイスラームが重用され、推奨されました。つまりリベラルなイスラームの方が、集団としてのポリティカルなイスラームよりも政府にとっては扱いやすかったのです。例えば、優秀なイスラーム学校を出た生徒たちをアメリカやカナダに送って、そこで勉強させるような政策が取られたり、リベラルを謳うイスラーム学者たちを優遇したりということが行われました。

石井　インドネシアに関するまた基礎知識を欠いた質問で恐縮なのですが、人口構成でいくと国民の9割がムスリムの国であると同って、エスニシティでいくと、その9割はマレー人なのかなと想像します。他方で人口比的な「マイノリティ」ではあっても、例えば商業・経済の領域での華僑の力が非常に強いとも理解しておりまして、華僑との共存という意味で、「穏健なイスラーム」は、華僑勢力との共存という政策的なコンテキストでは重要性をもっていたのではないかと推測します。

今回翻訳された「ムスリムになりたい豚」の作品は非常に面白かったのですが、この豚をムスリムとして受容しようと支持しているこのウラマーは、豚を食肉解体して消費対象として使うことをむしろ是認していて、自らが業として営んでいるという設定でしたね。恐らく華僑の社会文化の中では、たとえイスラームの国の日常性のなかの生活であっても、豚肉を食べることはごく当たり前に起こり得ることだと推測します。この主人公のウラマーが消費対象として豚肉を扱っているという設定自体が非常に面白くて、この辺に華僑との共存関係も包含したインドネシア社会の在り方が関係しているのかな、と思いました。

野中     ありがとうございます。民族構成としては、オフィシャルにはインドネシアにはインドネシア民族しかいません。その下のカテゴリーとして、多数のエスニック・グループがあります。マレー世界全体でいえばマレー人という言い方が一般的ですが、インドネシアの場合は、国民がマレー人だとは言いません。ジャワ人やバリ人、マカッサル人など、それぞれの言語と文化、生活習慣を持っているエスニック・グループがあり、それ自体で300とか、数え方によっては700ぐらいあると言われています。それ以外に華人系やアラブ系のように外からやってきた人たちがいます。

077

イスラーム教徒ではない華人たちは豚を食べるので、主に華人が多く住んでいる地域ではもちろん豚肉を売っています。インドネシア人ムスリムたちも、豚を食べている人たちがいるということも知っていますし、どこで売られているかも知っています。豚を見たことも聞いたこともない、というような社会ではなく、豚は宗教的には忌避される存在だけれど、社会の中では普通に売られ、消費されている。フェビーが今回の作品の中で豚を、最終的に食べる・消費する対象という形で描いたことも、もしかしたらこうした社会状況と関係しているのかもしれない。

石井     ちなみに、この作品集が海外で刊行されているのはイタリアだけですか。

野中　　そうです。イタリア語版です。経緯は分からないのですが、イタリア語で出版されたと聞いています。

石井　　意外と中東やイスラーム圏の翻訳は、イタリア語訳が結構出ているのですよね。英語訳はないのですか。

野中　　まだないようです。

石井　　私も買って読もうと思いました。

野中　　『処女でないマリア』に収録された19作品のうちいくつかは、英語訳されてネットで出回っています。

竹田　　服装がだいぶ変わってきたということをお話しされていました。服装がイスラーム的になっていくという流れは、例えば女性がヒジャーブを着けたり、ゆったりした服装になったりするという流れだと思うのですが、1980年代ごろからということは、留学組が湾岸諸国、サウジアラビアを中心に行く流れができて、本場のイスラームに憧れて服装を変えていくという流れもやはりあるのでしょうか。イスラーム化というのだけれども、アラブのサウジアラビア的なものへの憧れとか、例えばアバーヤといっても、ゆったりとした服装は多分黒い服を好んだり、男性であれば白くて長い衣を着たりというのは、元々インドネシアにはなかったものでしょうか。その点を教えていただければ幸いです。

野中　　どうもありがとうございます。服装の話で、以前に岡さんの主宰されている「イスラーム・ジェンダー」研究会で一度発表したときの資料がありますので、こんな感じという雰囲気だけ見ていただければと思います。（写真を共有しながら）これは私が1990年から1991年にかけてインドネシアに最初に留学したときの写真です。高校生時代の若かりし私が真ん中に写っています。周りは高校の友人たちです。見ていただいて分かる通り、私以外全員イスラーム教徒ですが、誰もヴェールを着けておらず、ジーンズをはいたり、半袖シャツを着たり

しています。それから、この写真は私の留学先の高校の担任の先生とインドネシア語の先生とドイツ語の先生と撮った写真です。先生たちも、誰もヴェールを着けていません。またこの写真は、ラマダーン明けのイードの日です。「今日は宗教的な格好をする日だから、頭に羽織り物をしなさい」と言われて、その日だけ、いわゆるショールのな薄手の布を頭から羽織りました。それが1990年代初頭の地方都市の様子です。

こちらは、2000年代初頭の写真。大学生たちの間でイスラーム運動が盛んになり、自らがイスラームを学ぶことからスタートし、それを周囲に広めていくダアワの運動が広がっていきます。先駆的にヴェールを着けるようになった女性たちが、この運動に参加していた都市部の大学生たちです。1980年代後半、ダアワ運動が始まった当初は、女性たちが身に着けるヴェールは販売されておらず、テーブルクロスにする布を正方形にかがり、それをヴェールとして着用していたと聞きます。2000年代には、すでにヴェールは販売されるようになっていましたが、当時は、地味な色で無地のヴェールが一般的でした。これが2000年代前半です。

こちらは、2010年代に入ってから写真です。ヴェールやムスリマの服装がファッション化して、ムスリム服に特化したブティックも次々オープンする時代です。2010年代半ば頃、現地でインタビューをした女性たちの写真です。黒い服の女性もいますが、皆それぞれに様々な色の服を着用しています。

竹田 勝手なイメージで、女性は黒いアラブ風のを着ているのかなと思っていたのです。フィリピンのミンダナオ島に結構知り合いがいて、あの地域は黒いアバーヤを着る女性が若い人たちに増えているようで、男性は白くて長い衣を着るような感じでした。男性はどういう服装に変わってきているのですか。

野中 男性は、女性よりも服装の変化が分かりにくいのですが、イスラーム的な服装というと、Tシャツに短パン姿というのはそもそもアウトです。最近、流行っているのは、預言者ムハンマドがくるぶしより少し上の長さのズボンをはいていたという逸話がインドネシアでは広

まっており、イスラーム的に振舞いたい男性たちは、皆、少しだけ短い丈のズボンをはいています。私の感覚では少し格好悪く見えるのですが、これが預言者ムハンマド<sup>\*30</sup>のスナダと言って、多くの男性が好んでこうしたズボンをはいています。

竹田 スナダだからということですね。アラブ服のようなものは、流行っていないのですか。

野中 一般にはほとんど着られていません。

竹田 やはり違いがあるのですね。服装にちょっと関心があったので、質問させていただきました。ありがとうございました。

国重 すごく魅力的な小説だなと思いました。読者層はどういう人たちなのでしょう。やはり小説が自分の言いたいことを代弁してくれたと受け止められたということは、イスラーム化に対して内心はちょっと行き過ぎているのではないかと感じている人がいるように受け取ったのです。どれくらい売っていて、どんな人が読んでいるのか、教えていただければと思います。

080

野中 ありがとうございます。冊数については、申し訳ないのですが、把握できていません。けれども、再版されたと聞いていますので、当初思われていたよりも読まれ、そしてさらに需要があったと言えるのではないのでしょうか。読者層についてですが、今のインドネシア社会の状況について、内心行き過ぎではないかと思っている人が多いと、フェビーと出版側は評価しており、そういう人たちがこの本を読んでくれるのではないかと考えています。『処女でないマリア』が再版され、2作目も出版され、フェビーの作品には需要があるということも、供給側も認知し始めています。この流れで、3作目も出してみたいと、フェビーも出版側とも考えていると思います。今は、この程度のことしかお答えできません。

もう一つフェビー自身が言っているのは、保守派と思われていた人たちの中にも、実はいろいろな考えを持った人たちがいて、その保守

の度合いもそれぞれ異なっていて、フェビーの作品を読んで「面白いね、こういう視点も大事だよね」と言ってくれる人もいたのだそうです。

山本 私も読者層のことを訊きたかったのですが、私もアラブ文学をやっていて一番困るのが、そもそもどれぐらいの人が特に小説、文学作品を読んでいるのかということです。結局、アラブ文学を論じてアラブの社会を語ることがどれぐらい可能なのかということを考えたときに、それを誰が読んでいるのかというのは欠かせないのですが、やはり分からないのですよね。なかなか数字として出なくて。

配布資料の「インドネシア文学の潮流」のところを読むと、1970～80年代にポピュラー文化が隆盛して大衆小説が流行したと書いてあったのですが、例えばアラブ諸国、エジプトなどと比べると、これは20年ぐらい早いのではないかという気がするのです。やはりそれは、経済発展や教育の進展、それから政治の自由化という流れがアラブ諸国と比べると非常に進んでいるというところが、ポピュラーカルチャーの現れ方に連動しているのだと思います。識字率も上がり、本を購入する金銭的余裕もできたというようなことが、読書の広まりにつながっていくわけですが、ここにフォーカスした研究がアラブ世界では成り立ちにくい。

2007年に、英の市場調査会社が大規模な読者層調査をアラブ諸国のいくつかの国で行った報告書を最近読んだのですが、すごく面白いのです。サンプルは少ないのですが、結局何をどれぐらい読んでいるかといったときに、ほとんど誰も文学作品を読んでいないことがかなりはっきりしてしまっただけです。

唯一レバノン人は若干読んでいますが、あとは読んでいても結局学校の授業で読んでいるだけで、読んでいるものがとても古いのです。インドネシアでいうとナショナリズムの45年世代のようなものを教科書で読んでいるだけで、趣味として読書を楽しむ層はいまだに全然育っていないということがある程度分かってきました。そのことを踏まえたときに、趣味や娯楽として文学作品を読むという習慣のようなものはどれぐらい広がっているといえるのでしょうか。

野中 1970年代以降、ポップカルチャーの中に小説が含まれていくというのは、まさに識字率がアップしたことと出版・翻訳の技術が上がったことがリンクしています。でも、若者の活字離れは、今まさにインドネシアでも言われていて、本を出しても売れないという話もよく聞きます。今日、ご紹介した作品は、国民的にかなり売れた作品ばかりで、例えば『ルプス』のシリーズは、何十作品も次々と書かれ、売れました。学術研究の中でも取り上げられており、日本語の先行研究があるものもあります。フェビーの作品がそこまで国民的に知られているかということ、まだ全然そんなことはなくて、新進気鋭の作家として私が取り上げているということです。

ただ一ついえるのは、短編小説を読む層は確実にいるということです。1980年代以降、100円程度の安い価格で販売されるソフトカバーの短編小説が、特に若い女性たちの間で読まれました。大学キャンパスの外で路地売りしているようなポケット本で、若者たちがそういうものを買って読んでいたという時代があります。現在、フェビーがとった戦略は、最初にインターネットで1作品ずつ配信してみるというものでした。そうすると、割とリアルに反応も分かります。当初は慎重に読者の反応を見たフェビーも出版側も言っています。いくつかの作品をインターネットで小出しに配信してみて、あまりに反応がネガティブなものだったら出版自体を検討し直そうということだったらしいのですが、インターネットでの反応が想定していたよりも良かったので、本にして出版しようという流れになったと聞いています。現在、インドネシアの若者たちの中でのスマホ率は大変高いので、小説のインターネット配信という流れは一つ可能性があるのではないかと思います。ただ、山本さんがおっしゃったように読者層を研究するのはなかなか難しく、手法も含めて検討していかなければいけない部分だと思います。

岡 予定の時間をだいぶ超過していますが、質問の手がたくさん挙がっていますので、まとめて質問を受け付けて、答えていただく形にしたいと思います。

久野 今の山本さんの質問と少し重なる部分もありますが、レジュメの

2 ページのインドネシア文学の潮流のところ、開発独裁が終わって民主化したと同時に「芳しき文学」という少し軽い文学が生まれ、イスラーム小説も生まれた。その次にフェビーさんのようなものが生まれる。フェビーさんは、両者の間に橋を架けることにならないとインタビューで言っています。フェビーさんと現在のイスラーム小説との関係はどのようなものでしょうか。そのあたりを教えてくださいと思います。

黒木 どうもありがとうございます。大変面白く、読み始めたら止まりませんでした。

さて「アッラーの雲が見える」という話で思い出したのですが、2010 年代にブリヂストンタイヤのアッラー事件<sup>※31</sup>というものがありましたよね。タイヤの凹凸模様がアラビア文字でアッラーと書かれたものに似ている、そのタイヤが靴のごとく地面を踏んでいるのはけしからんというクレームから始まったものでした。木の枝などを見るとアッラーの文字にだんだん見えてくるというのはよくある話で、私がシリアにいた 1990 年代には、そういう絵はがきのようなカードが売られていました。並木の絵が描かれていて、そこに「ラー・イラー・ハ・イッラー・アッラー」（「神のほかには神なし」というムスリムの信仰告白の一部）という言葉がアラビア文字で浮き上がっているのです。そのお店ではスーフイズムの指導者のプロマイドのようなものも売られていました。

それはさておき、一つはコメントなのですが、久野さんから指摘あったようなイスラーム的覚醒、あるいは過激化のようなものが、国際政治的なものと密接に結び付いて、9/11 からイラク戦争、そしてスンニー派・シーア派の対立がサウジとイランの間を中心に、進んでくるわけです。サウジなど湾岸方面に留学した人々が帰ってきて大きな影響を及ぼすというお話がありましたが、それだけではなくてサウジが特に 2010 年代に入って、シリア内戦などが絡むわけですが、巨額の資金をマレーシアやインドネシアに投下し始めて、印刷物も広く行き渡るようになりました。この要素は無視できないのではと思うのです。

あと、これはショートショートのものすごく面白い作品だと思って

読んだのですが、インドネシアの人たちもいわゆるノクタ<sup>※32</sup>というか、笑い話、小噺をお互いにして笑い合うような習慣や伝統のようなものがあるのでしょうか。

084 佐藤 私も読者層の話が気になっています。BL（ボーイズラブ）文化のアジア諸国への展開をまとめた『BLが開く扉——変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』（ジェームズ・ウェルカー編著、青土社）に、インドネシアについての章（ギタ・プラムディタ・プラメスワリ「不調和な情熱——インドネシアにおけるボーイズラブ・ファンのアイデンティティ交渉とLGBTに向けるまなざし」）があるので、そこに「保守的と思われていた層にもグラデーションがある」というお話と共鳴する部分があったのを思い出しました。この章には「イスラームで同性愛はハラームだ」と言いつつもBL小説を読んでいる女の子たちが登場するのですが、彼女たちは「これ（BL）は日本の文化だから」とか、「同性愛の行為はハラームだけど、それを描いたものを読むことは別にハラームではない」とか、いろいろと理由をつけて読んでいるのです。

今回ご紹介いただいた小説は文学的なものだと思うのですが、保守的なイスラームでは否定される要素を含んだエンタメとしてのBLが「でもこれはフィクションだから」「娯楽だから」「他の国の文化だから」という理屈で緩く受容されている状況と、類似した部分はあるのでしょうか。

もう一つ、インターネットの話も出てきましたが、先ほどの本には、インドネシアではWattpad（ワットパッド）という小説投稿ウェブサイトが盛んに利用されていて、そこから書籍化される例も多いと書いてありました。

田浪 たくさん質問が出ていたからもういいかなと思ったのですが、質問と感想というか、すごく面白くて本当にありがとうございました。インドネシアというと、私などはヨルダンやパレスチナ、それからイスラエルのアラブ人でも、割と豊かな層で、インドネシア出身の女性をメイドとして入れている家庭が結構あります。やはり大概是ムスリム同士だし、インドネシアの人でもアラブ社会ではわりと働きやすいよう

すで、自分で一生懸命アラビア語を勉強していたり、という印象があります。

先ほど黒木さんのコメントにもありましたが、インドネシアにはすごく語りの伝統があると思います。以前、国際線でインドネシアの一行と一緒に、降乗のタイミングでおじいさんが大勢の人に向かってしゃべっているところに遭遇したのですが、飛行機から出ないといけなのに動きが止まってしまって、みんな動じずにその話を聞いているのです。何かすごく面白そうにしゃべっていて、聞いている人もニコニコしながら聞き入っていて、すごいなと思ったことがあったのです。

マジカル・イスラームという手法について伺いましたが、やはりマジックリアリズム、サルマン・ラシュディなどが使っているようなファンタジーとユーモアを交えながらの手法を連想しました。そういうインドネシアの語りの伝統のようなものと、彼女がロンドンで勉強されているということで、特に英語圏での現代文学の手法などの影響があるのかというあたりを、マジカル・イスラームの手法に関してもう少し伺いたいと思いました。

o85

野中 皆さん、ありがとうございます。手短にお答えしたいと思います。

久野さん、どうもありがとうございました。久野さんが整理していただいた流れで大体そのとおりなのですが、ヘルフィ・ティアナ・ロサからスタートしたイスラーム的な小説の流れは今でもあります。

これは2010年以降、長編化し、しかもドラマや映画とタイアップするのが主流になっていきました。ヘルフィも当時は短編小説を書いていましたが、最近は長編を書くようになっていきます。先のジャカルタ州知事の「クルアーン冒瀆」に対する反対行動について、フェビーは、その大決起集会で多くの人が「Lafazを見た」言っていることもパロディー化しています。一方、ヘルフィ・ティアナ・ロサは、この反対行動自体をとっても美化していて、あの抗議デモは抗議ではなくてイスラームを讃えるものであり、イスラームが平和で兄弟愛に満ちたものだということを体現していたという論調で、これを題材にして小説を書いています。フェビーは直接的にヘルフィのことを批判はしないし、しかも年齢的にも、ヘルフィの方が10歳ほど年上なので、「へ

ルフィさんにも私の作品を読んでもらいたい」などと言ったりしています。研究の視点で言えば、二人の作品を比較してみると大変興味深いです。

読者層について言えば、1990年代末以降、流行した「芳しき文学」を面白いと思って読んでいたような層の女性たちと、フェビーの作品を読む読者層は、一部重なっているのではないかと感じています。当時、『サマン』や『スーパーノヴァ』を読んだという人たちが今はフェビーの作品を喜んで読んでいるということではなくて、『サマン』や『スーパーノヴァ』を好んで読んでいた都市部の自立した女性たちの層の中に、現在では、フェビーの作品を読む人たちが含まれているのではないかという感じです。きちんと調査出来ているわけではないので、今のところは私の肌感覚に近いですが。

それから、黒木さんご質問どうもありがとうございました。上手に説明できませんでしたが、黒木さんにおっしゃっていただいたように、それから先ほど竹田さんにもご指摘いただいたとおり、1970年代以降のサウジおよびエジプトに留学に行く流れ、それから彼らが帰国後にイスラームを広めていく動きと共に、サウジからの資金の流入も、インドネシア社会に与えたインパクトはとても大きいです。これは実はもう1960年代末頃から始まっていました。1970年代以降のインドネシアのイスラーム化を後押ししたプッシュ要因の一つとして、イスラーム関連書籍の翻訳出版が指摘されていますが、サウジからの資金はこの流れをかなり強くサポートしました。サウジからの資金によって出版されたイスラーム関連書籍は、この時代かなり沢山あり、ダアワ運動に参加する学生たちがこれを読み、活動の参考にしていったのです。

ただ、女性たちがそういうものを喜んで読んだかという点、そこは少し疑問です。男性主導のダアワ運動であり、男性たちはこういう翻訳本を指南書として読んだのですが、女性たちはいまいちそういうものに共感できず、だったら自分たちで書いてしまおうという流れがあったのだと思います。先のヘルフィ・ティアナ・ロサは、この時代のまさに中心的な女性活動家であり、作家の一人です。

それから、これは田浪さんご指摘にも関わりますが、スピーチに小啻的な笑いを入れていくという伝統は確かにあります。金曜礼拝後

の説教の中でも、インドネシアでは、ウラマーや説教師がユーモアを交えて話を進め、聴衆を笑わせてなんぼというところがあります。都会の説教師だけでなく、地方に行けば、各地方で、現地語や伝統的な話術を用いて、ウラマーたちはみんな、聴衆を喜ばせる術を身につけています。そういう伝統も、もしかしたら関係しているのかもしれない。

また、これは私がきちんと勉強しなければいけないのですが、黒木さんがご指摘のとおり、インドネシアで伝統的にイスラームを学んできた人の中にスーフィー系のグループがあります。スーフィーの影響は恐らくものすごく強くて、死後の世界を描いていくようなフェビエーの手法も、もしかしたらその関係があるのかもしれない、フェビエーが読んでいたものの中にももしかしたらそういうものがあったのかもしれないと、今ご指摘いただき感じました。もう少しフェビエーへの聞き取りも含めて今後調査してみたいと思います。

佐藤さんのご指摘も大変興味深いです。たしかに、インドネシアの女性や若者たちの間で、BL小説、よく読まれていると思います。質問に上手にお答えできるか分かりませんが、例えばコスプレもインドネシアでは大変人気があります。ヒジャーブを着けている女性たちがしやすいコスプレキャラクターがあるらしいです。例えば初音ミクの長い髪はヒジャーブでできるとか、ロリータファッションとイスラーム服はすごく親和性が高いとか、彼女たちなりにすごく工夫して活動しています。ヒジャーブを着けている女性たちが集うコスプレ・コミュニティというのが各大学で創設されたりもしています。また、あまり関係ないかもしれませんが、ムスリム大国でありながら、AKB48の姉妹グループJKT48が日本のアイドルと変わらない衣装を身に着けて劇場で踊るということも許容されていますし、これを好んで見に行く人たちもいます。BL小説を読み、コスプレを好み、JKT48を応援する人たちがいるというのも、インドネシアの多様性の一つの表れかかもしれないと思います。

それから、ワットパッドのことですが、私自身、技術的なことがよく分かっていないので上手に説明できなかったのですが、恐らくフェビエーもそういうツールを使って小説を配信していたのかもしれない。今後、調べてみたいと思います。

田浪さんのご指摘に関して。黒木さんへのお答えである程度カバーしたと思うのですが、英語圏の作品がフェビーにどれぐらい影響を与えているかということでした。年次は分からないのですが、彼女がロンドン大学で修士号を取ったのはかなり最近のことですので、彼女の作風にイギリスで学んだことはそれほど影響を与えてはいないのではないかと思います。確かなことはもう少し調べないと分かりません。一方で、先ほどお話しした通り、インドネシアの小噺的な伝統がフェビーに影響を与えているのは間違いないと思います。

岡 金曜礼拝の説教にユーモアを必ず入れるというインドネシアの伝統が維持されるかどうかというのも今後のイスラーム化の一つの指標になるのかなど、伺っていて思いました。それから、フェビーさんと並んで名前が挙がっていたヘルフィ・ティアナ・ロサさんですが、『中東現代文学選 2021』に野中さんが、ヘルフィさんの短編も寄稿してくださっています。「赤い闇」という作品ですが、これはイスラーム覚醒の話とはちょっと違いますね。

088

野中 そうですね。今日のヘルフィ・ティアナ・ロサの話は、特に近年のフェビーとの作風の違い、という観点でご紹介しました。また、1990年代に流行したイスラーム短編小説の主要作家であり、ダアワ運動に参加する若い女性たちを後押ししたこともお話ししました。同時に彼女は、弱い女性たち、虐げられた女性たちのことを描いていきたいという思いを一貫して持ち続けています。今回の『中東現代文学選』に掲載していただいた「赤い網」という作品は、今日紹介したような軽い読み物ではありません。インドネシアの西北の端にあるアチェ地方で家族を殺され、自身も強姦されて心を病んだ若い女性の物語です。アチェでは、インドネシアからの分離独立の動きが、インドネシアの建国以降一貫して存在しています。それをスハルト大統領の長期権威主義体制期から民主化初期にかけて、政府および国軍が徹底的に弾圧した時代がありました。2000年代初頭のアチェで、家族全員が分離独立運動のゲリラの一味だという汚名を着せられて殺され、彼女自身も強姦され、トラウマを抱えている若い女性のことを描いた短編小説が「赤い網」です。今回紹介した作品群とは違う作風ですが、これはこ

れで大変読み応えがありますので、ぜひ皆さんに読んでいただきたいです。よろしくお願いします。

岡　　戦時性暴力の話でもあり、ものすごく重たい作品ですね。その点でも、フェビーさんの作品とは全く違うタイプのものです。

では、野中さん、みなさん、長時間ありがとうございました。